

クリニック・ドゥ・ラ・ボルドを訪ねて 根源的な思索を問いつづけて

中 村 総一郎

(写真家／メディアプロデューサー)

パリから西へ車で2時間くらい行きますと、1500年代に数多くの城が建てられたロワール河畔の中にシャンボール城があります。当時の王、フランソワ1世の建てた城として世界的に有名で世界遺産にも指定されています。その城の大きさといい、優美さや歴史的な背景を考えますと、なるほどと思わされるものがあります。

10月初旬、思いもおよばぬ符号からT先生とその城に隣接するホテルを宿にして、シャンボール城周辺の散策に出かけることになりました。その時期、気候は朝晩が少し冷えますが、ほとんど日本と変わらず、今回の小旅行では好天に恵まれ、その昔、狩猟のための森や草原がつづく中で、空の青さと空気の澄んだその環境は開放的な気分で、今風の言い方をすればところが癒される時間を持つことになったわけです。

そのシャンボールの地から4つくらい村を車で走り抜け、およそ15分。そこに、クリニック・ドゥ・ラ・ボルドという病院が森の中にあります。ロワール河畔に点在する城の一つを現在は精神科のクリニックに使用しています。1953年からといいますからかれこれ50年あまり、そのクリニックは活動しているわけです。

フランス哲学や精神医学に関心を持った人には、このクリニックはとてもシンボリックなところと言えます。哲学者であり、精神科医である故フェリックス・ガタリが長く勤務していたところであり、ジャック・ラカン、R・D・レインとこのクリニックにまつわる人たちを挙げればなるほどと思えるような、フランスの精神医学史のある

部分を担っているところと言えます。その中心になって活動しているのがジョン・ウーリ先生になります。高齢にもかかわらず、精力的に活動がなされ、毎月一回夜11時からのオープン・セミナーが80年代から行われているそうです。

ここで行われている精神医学の根源的な問いが50年代、60年代からの問題意識を今なお持ち続け、



シャトーと呼ばれる、病院の中心棟



医師と患者さんが一緒に昼食をするグループで、これも治療のひとつ。(シャトー1階にて)

「制度的精神療法」「クラブ」といった活動や概念に現れています。

「クラブ」というのは、グループでの共同作業、あるいは芸術作業においても、以前読んだ三脇康生氏の文章によると、一つに、グループの責任者は常に同じグループの責任者にはなれない。この時の文章では常に、抽選で決める。また、患者さんも、決まったグループに参加するのではなく、その時の気分などで選択する。つまり、義務や強制にならない。そして、常に選択肢を最大限に数多く設ける。こうした中で「クラブ」という作業療法を施すことになっている。「いわゆる芸術療法とは違う。アメリカの精神療法とは違うのだ」という言葉がジョン・ウーリさんのテキストにもあります。

クリニックの敷地の外れにある、木造の建物の壁にモザイク状に緑に黄色の文字で「Le Club」と描かれた中に入ってみると、作業を終えた後で乱雑になった机や椅子が幾つかある室内には、何かクリニックらしくない、カラフルにペイントされた画家のアトリエのようにも思える。

ちょうど昼食時であったこともあって、クリニック内の医師や患者さんたちを交えた食事に、一緒にいかがですか、という誘いに喜んで参加させていただきました。隣に座る患者さんの天使のような微笑みに、至福の昼食を味わうことができました。

ジョン・ウーリさんの著作を読むと、50年前のことが今なお今日的な課題であり、根源的な思索に精神病、システム、組織を遡上にのせ、問い続ける彼らの活動に日本、フランスの違いがあるとはいえ、わたしたち、日本の現在性のなかに問われるべきものを逸してしまったものがあるのではないかということ強く感じる。

著作の中に「シャンボール城は、あまりに大きな城内で、冬は寒くて生活ができない」という記述があり、もしかするとラ・ボルト城ではなく、シャンボール城をクリニックにという考えも彼の脳裏にあったように思える。戦後のフランスにあって、そうした考えを実現するということが可能な時代でもあったとはいえ、彼の持つイメージの大きさに驚嘆する。

【著者連絡先】

〒236-0046 神奈川県横浜市金沢区釜利谷西6-24-2

中村総一郎

E-mail : burroughs@tokyo.email.ne.jp